日本の米育ち

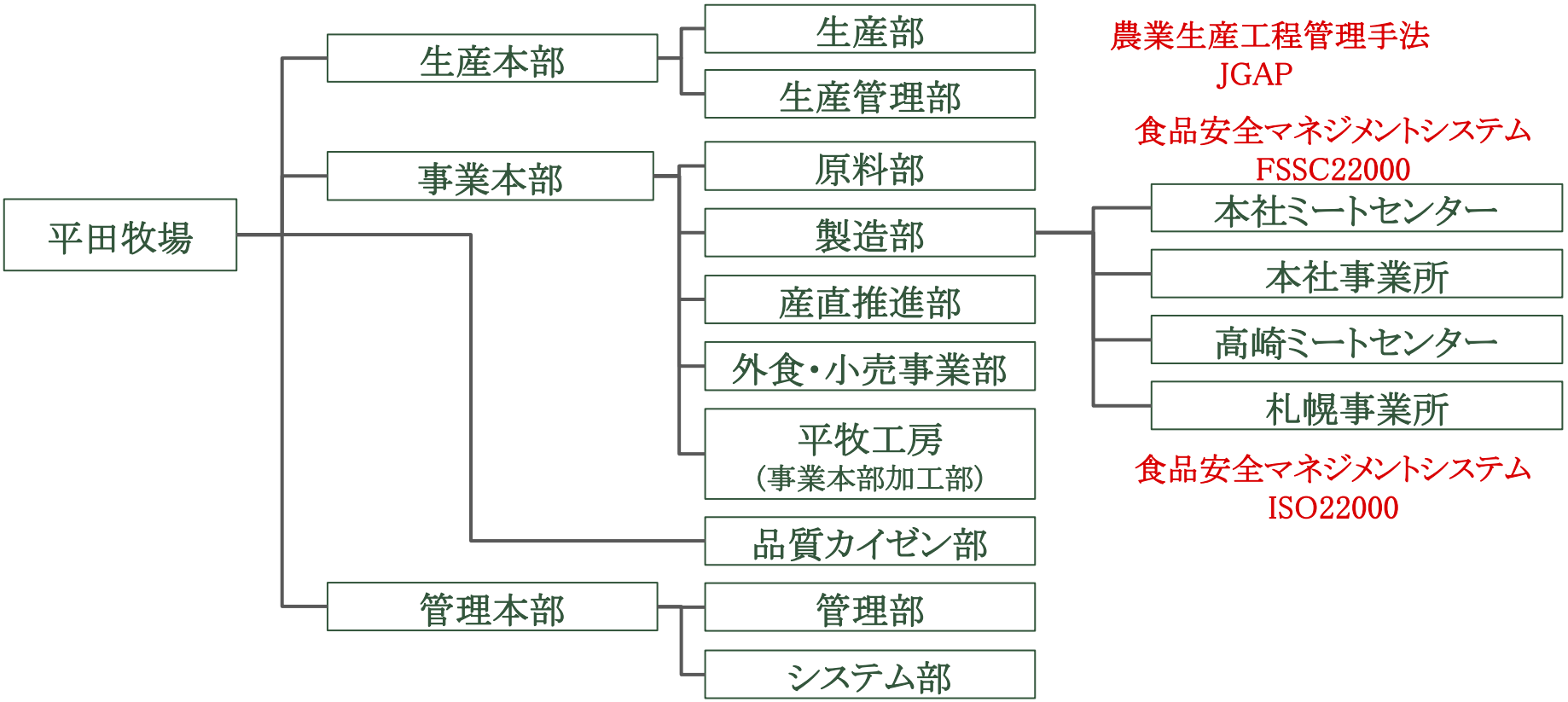
平牧場田

三元豚

金華豚

平田牧場グループ概要

創業：	1964年(S39) 12月	農場数：	47(直営10／提携37)	飲食店：	6店
設立：	1967年(S42)　2月	生産頭数：	約15万頭	物販店：	3店
従業員数：	約600名	製造拠点：	食肉4／加工品1	併設店：	4店
		営業拠点：	工場併設4・営業所2	観光施設：	1店



平田牧場概要

（養豚生産から加工、販売まで）

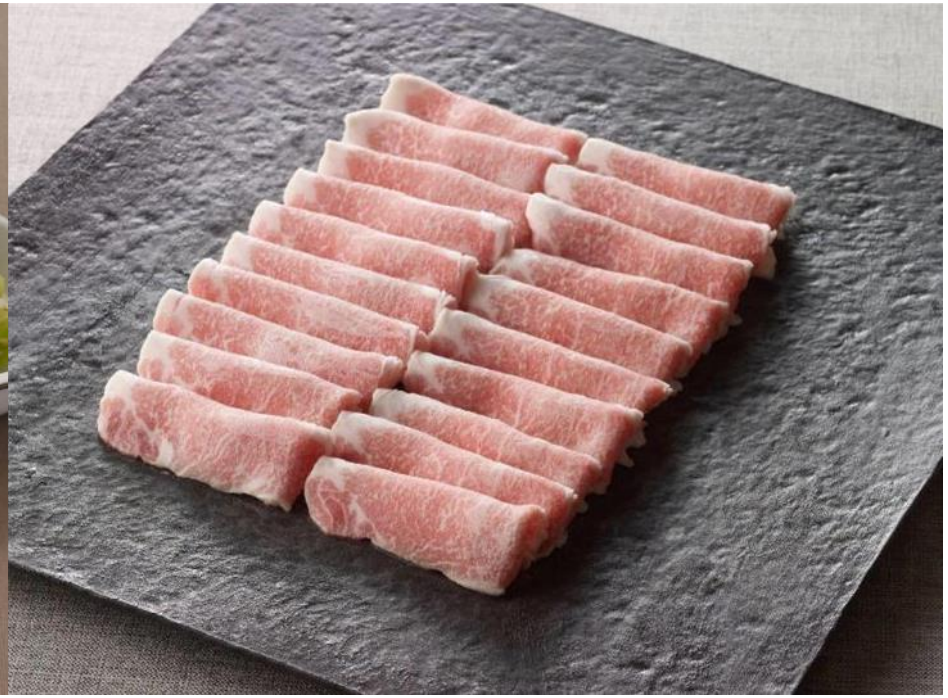
平田牧場概要

KITTE 丸の内店

東京ミッドタウン店

玉川高島屋S・C店

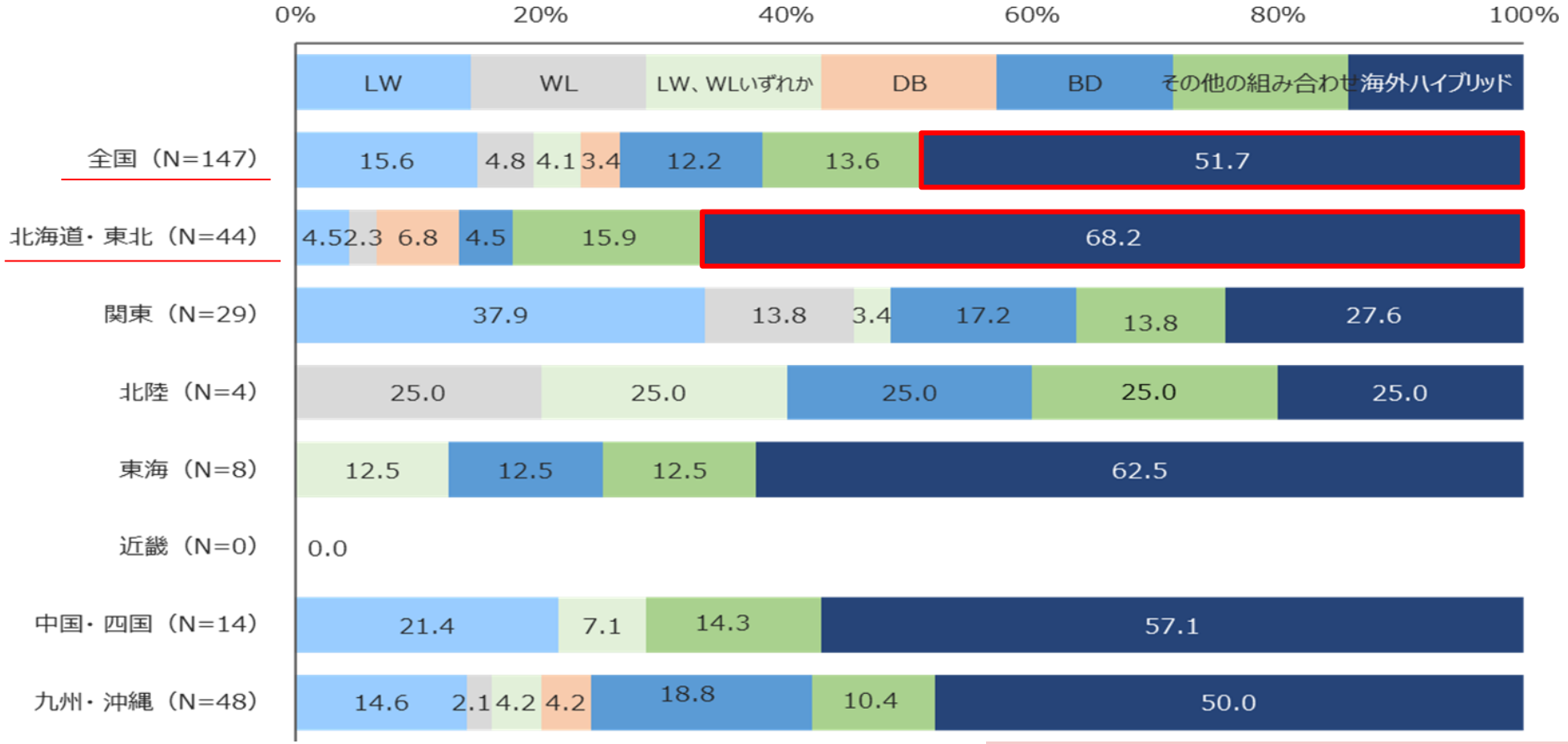
エキュート東京店



最近の養豚情勢

飼料をはじめとしたコスト高や豚肉輸入量の増加に対応し、生産コストの改善は必須。その一環として国内では多産系の飼養頭数が増加。

一般社団法人日本養豚協会　令和３年度 養豚農業実態調査報告書 より
子取り用雌豚【交雑種】の飼養頭数割合：地域別



・海外ハイブリッドが全国平均で50%を超えており、北海道・東北では約7割を占めている。

豚の大型化に伴い、日本格付協会の枝肉基準も下限・上限共に 3kg 上がる。(68～83kgに。)

生産概要

農場数：47（直営：10／提携：37）　年間出荷頭数：約16万頭

開放型豚舎　のびのびと、ストレスなく育ちます

食料の国内生産力をまもります
平田牧場の豚は
全頭「日本の米育ち豚」

牧平場田

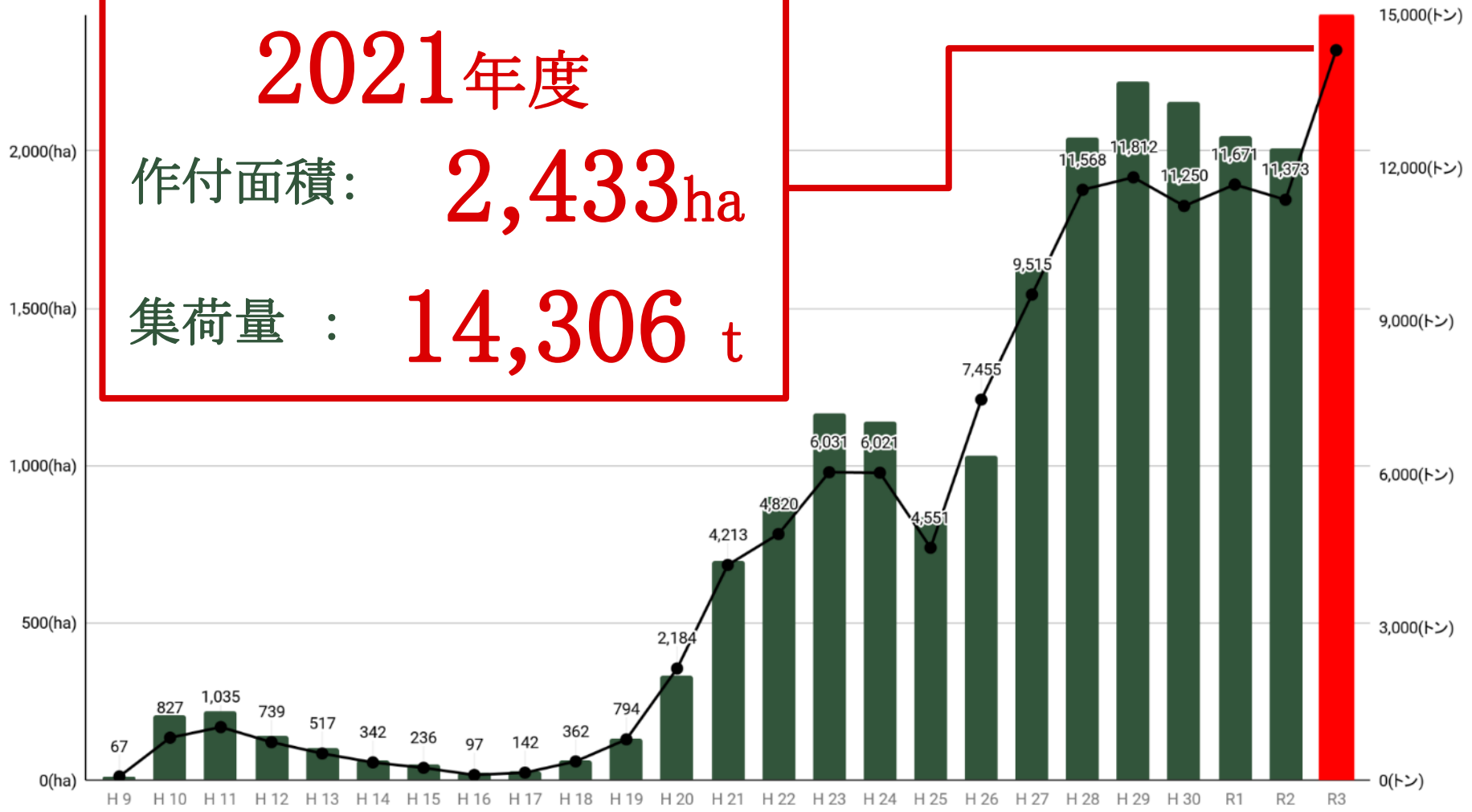
飼料用米の取組み規模

縦棒：作付面積　　折れ線：集荷量

2021年度

作付面積：2,433ha

集荷量　：14,306 t



飼料用米の配合割合

	肥育期(約120日)		1頭当り 米 消費量
	前期	後期	
飼料用米プロジェクト 開始当初 2006(H18)年	―	5%	9.5kg
本州生産	15%	35%	83.0kg
本州生産(金華系)	15%	45%	102.0kg
北海道生産	35%	45%	124.0kg

・国民一人当たりの**年間米消費量は約50.7kg**　(農林水産基本データ集より)

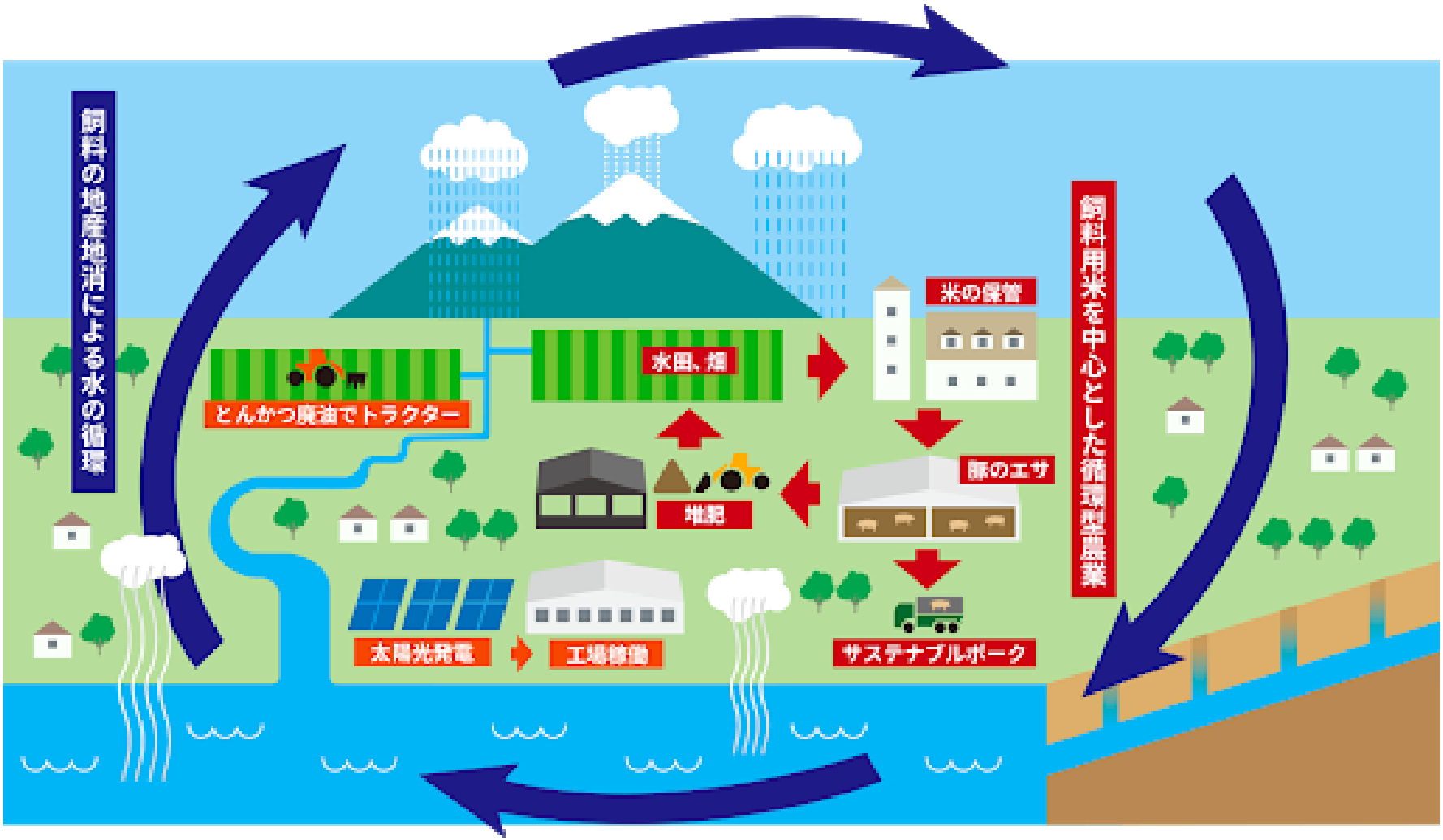
・平田牧場の**豚の消費量**(本州、83kg/頭)**を年換算**すると**約252kg**。 人のおよそ**5**倍

・更に北海道は**豚の消費量を年換算**すると**約377kg**へ。

牧平場田 飼料用米の意義

1.	【食料自給率向上】 食料自給力を飛躍的に上昇させるモデルであること 国内の**減反田約100万ha**を耕作することにより**穀物自給率を20%アップ**できるモデル
2.	【国土・農地保全】 社会の宝である子供達に、しっかりと維持管理された国土を渡せること 水田フル活用による農地の保全。貯水機能による温暖化防止や水害防止。
3.	【水田文化の継承】 世界に誇れる日本古来の水田文化を守れること
4.	【食の安全】 そこから収穫できる米を家畜に与えることで、遺伝子操作のない安心、安全、高品質な畜肉が生産出来ること。**日本の米は究極のNON-GMO**
5.	【食料安全保障】 平成五年のような大凶作時にも米が不足しないこと。
6.	【耕畜連携、資源循環】 家畜生産の排泄物から作られる「質の高い堆肥」を土地に戻すことで 土地を肥沃に出来ること
7.	【農業活性化】 疲弊している農村に活力を与えること
8.	【環境保全、食料安全保障】 環境破壊、人口爆発による食料の奪い合いに備えた食料安全保障を図ること
9.	【水の循環】 世界的な水不足が問題になるなか、他国の水資源を奪わない。
10.	【SDGs】 国内で穀物を賄うことによって、海外からの輸送に関わる温室効果ガスを削減。

山形県庄内地方の資源循環の取組



牧平場田 飼料用米の意義

これまで

いざという時に すぐに 飯米 に
切り替えられる「食料安全保障」
としての考え方。

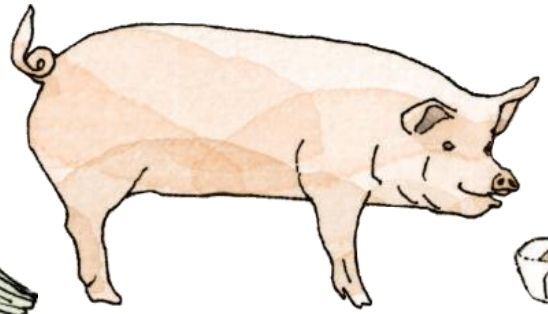
転作作物のひとつ

これから

食料安全保障としての考え方に加え
「飼料を生産する」という考え方もあるべきでは。

飼料に米を使う＝日本の家畜の特徴として

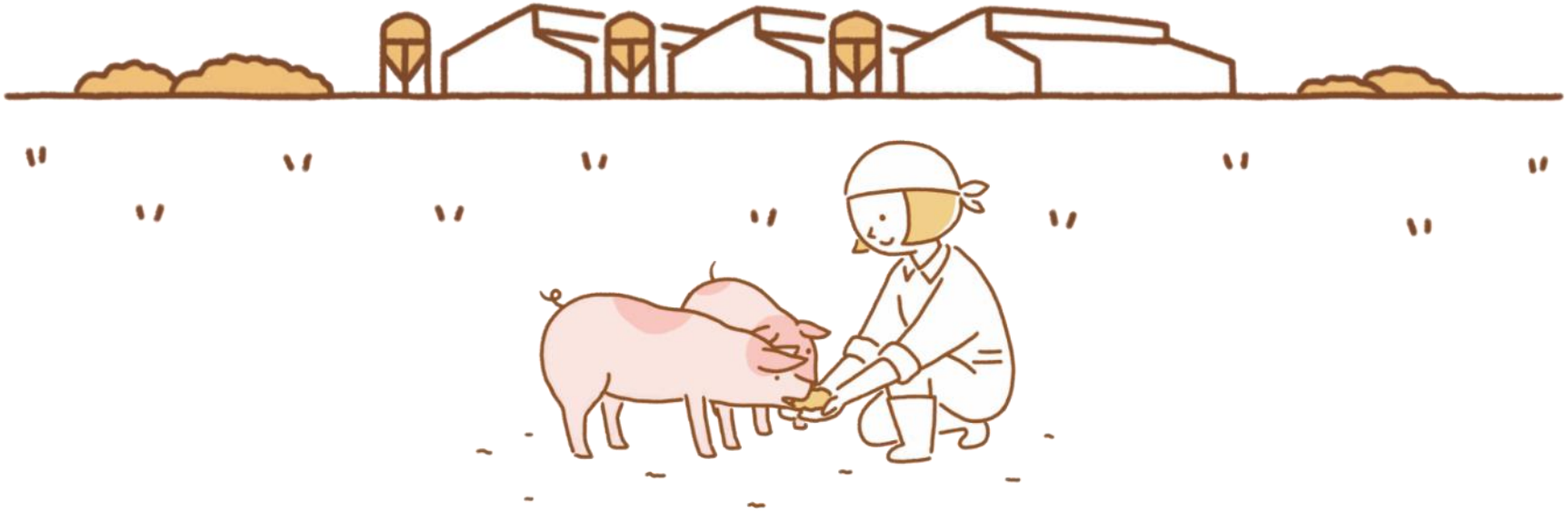
→　山形県庄内地方において
高タンパク米の実験取り組み
を開始。
- ローカルSDGsの推進
- 堆肥の活用と資源循環



牧平場田

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

穀物自給率向上をめざし、
飼料の国産化比率をアップさせていきます

飼料用米の取り組みを さらに 拡大していくと ともに、
国産トウモロコシの利用にもチャレンジし、

指定配合飼料の国産比率 50% を目指します。